
twilight world

江角 稚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

t w i l i g h t w o r l d

【Nコード】

N 6 7 0 4 X

【作者名】

江角 稚

【あらすじ】

とある男の逃亡日記。

今、言えるのはそれだけです。そもそもt w i l i g h tとは、はつきりしない状況、やみの部分、”と言う意味ですから。”

曖昧なる世界に、包まれて見て下さいませ。

第一話（前書き）

ちよこちよこ書き溜めて、しばらく溜まったら投下する…と言うつ、マイペースな物を一つ作ろうかと。

頑張つて”ハイペースなマイペース”になれば良いのですが。

とか言つて、また散策するのでしょうか。理由は、ネタ探しです。

第一話

「俺は女を殺した。殺してしまった。じきに警察が、此処にやって来るだろう。その前に、逃げなければ。どうしても此処から、逃げ出さなければ……」

そして気がついたら、俺は狭い裏路地にいた。薄暗さが奇妙な温もりを作り、俺を匿うように抱いてくれる。

さて、どうしたものか。

俺はひとまず落ち着いて、呼吸を整えてから考えた。

…随分と走ったようだ。周りの景色が、何もかもが分からぬ。まるで、異国の地へと迷い込んだようだ。

土地勘がなければ、逃げるのは不利だ。かと言って、自宅へ帰る気にもなれない。

もしも俺が殺人犯だと知れたら、捕まってしまうから。どうしても俺は、捕まることを避けねばならない。

幸い、仕事も尋ねて来る友人もない。親も、とっくの昔に亡くなった。俺が帰らなくとも、不審がる人物などいない。

かと言って、いつまでも逃げ続ける訳にもいかないのだが。

一体、どうすれば良いのだろう。

しかし、疲れた。これ程の距離を走ったのは、久しぶりだ。
ああ、もう駄目だ…。

また、意識は遠退いていった。

朝だ。俺はこのまま、一夜を明かしたらしい。人通りの少ない道が
幸運をもたらしたのか。それとも、ただ酔い潰れたサラリーマンに
しか見えなかったのか。

どうでも良いが、こんなラッキーがいつまでも続くとは思えない。
今晚は、何処か別の場所へ行かなくては。

それにしても…腹が減った。喉も渴いている。

それもそうだ。夕べから、何も口にしていないのだから。

夕べは、何があっただんだけ。
上手く思い出せない。

白く細い、女の首筋。

跳ねる喉。

力を込めた指先。

そして、事が終わった後に押し寄せる、引っ掛かれた傷の痛み。

…ああ、そうだ。

俺は、逃亡中の殺人犯だったっけ。

ふと見ると、両腕には引っ掻き傷が残っていた。まるで、断末魔の叫びを腕に描いたような美術性。

その刻み込まれた作品に、俺の興味はちつとも湧きもしなかったが。

ただ、痛みはない。

残ったのは、ただのミミズ腫れだけだ。

勿論、この傷を見たからと言って、心が痛むこともなく。

何と無く、傷が癒える頃には殺人のことも、綺麗さっぱり忘れられる気がした。

第二話

この見知らぬ街をさ迷うこと、三時間。
初見の地は不慣れだ。

…しかし、地図を買う訳にもいかず。

もしこのタイミングで地図などを買ひ、俺がこの街の新参者だと世間に知れたら——疑われることこの上ない。

と、言う訳で。

仕方なしに、徒歩で巡る。昼間とは言え、人通りの多い街を。

もしも今が冬なら、コートの襟を立てて顔を隠すことも出来るのだが…あいにく今は、望みとは正反対の季節だ。

——いや。正確には、もう夏ではない。

暦上では、もう九月下旬だ。それなのにこの残暑とも言つべき蒸し暑さは、真夏を感じさせる。特に、頭上でギラギラ照り付ける太陽とか。

夕べはアスファルトからなる路上で眠ったからか、腰も痛いし眠気も覚めない。きっと眠りが浅かったんだ。——もしくは、殺人のために興奮して眠れなかったか。

それでも、女一人殺し、この街まで命からがら逃げ切った疲れで気を失った、とも考えられるが。

…とにかく。

眠い。…眠い。ねむい。

その三文字が、頭の中をグルグルと駆け巡る。

”眠いなあ…” 声にならないため、心の中で呟く。

そう、喉は未だに渴いたままなのだ。さっき自販機は見付けた。だが、残り少ない小銭を使いたくなかったのだ。

ちくしょう。札入れも通帳も、全部家に置いて来ちまった。

… たまたま小銭入れが上着のポケットに入っていたのは、不幸中の幸いなのだが。

表通りは目立つため、脇道に入る。そして裏道の入り込み具合に驚いた。

”まるで… 迷路だな”

迷子になったら最後、抜け出すことも難しい。いや、いざとなったら隠れやすい、とも言い換えられるか。

そんなことを考えていると、前から大勢の人がやって来た。

第三話

一体、誰だ？

建物の陰になっっているため、薄暗くてよく見えないが……。

まさか。

警察？

もう、此処まで追いつかれたのか。

やはり税金の無駄遣いではない。きっちりと仕事はしているのか。

仕方ない… 此処で捕まる…

… 訳には行かない。

俺は、周りを見渡した。

しかし細い路地は両側とも壁だ。逃げるための脇道もない。

引き返すか… 振り返ると、向こうからも人々の気配。

—— 挟まれた。

悟った、捕まることを。

逃げなくては。

… 分かっているのに、体は動かなくて。

両方向から近付いて来る姿なき敵は、まるで示し合わせたかのように、同時に目の前に現れた。

…不良？

いや、違う。かも、しれない。

鉄パイプやバットを引きずり、近付いてくる集団。それだけ見れば、不良に見えなくもない。

——って、

やばいな…この状況。

どうするか。どうするよ？

ってか、本当にどうすんの？

「おい」視界右側、先頭の男が話し掛ける。「有り金全部寄越せ」

「…どちら様、ですか」掠れた声を絞り出すように、言った。喉の渇きからか、恐怖からか。

見た所、不良とは違うようだが。武器は持っているし、数が数だ。これは…どうしたことだろう。

もしかすると、私服警官かもしれない。…にしては、ガラが悪過ぎるが…。

「お前に名乗る名など、ない」男は答える。「とにかく、財布を渡して貰おうか」

「…無理だな」俺は正直に言った。「訳あり、でな。財布はない」

財布は。

小銭はあるが…当てにならない程度。
しかも、それを取られたら生活出来ない。

「財布がない…だと？」男は問う。

「ああ」…声が、出なくなってきた。

「馬鹿にするな。今の御時世、何処に手ぶらで出歩く奴がいる」苛立たしげに、男は金属バットをアスファルトに打ち付けた。ガギイン、と、嫌な音を響かせる。

「いるさ、此処に」強がりを言う。しかし、状況は良くない。細い路地裏で、逃げ道はない。左右を武装した？男達に囲まれている。

俺は周りをざっと見た。

感想。…多い。

何だこれは。二十人ずつ、計四十人と言った所か。まるで不良クラスを丸ごと路地に押し込んだようだ。

…何で俺は、こんなに冷静なんだろう。

強行手段に出た男達が、一斉に、金属製の物体を振りかざしていると言っのに。

何か、叫び声が聞こえる。だが、何と言っているのか分からない。

「やっちまえ！！」的な声かな。そんなことを考えながら、頭目掛けて振り下ろされるバットを見ていた。

…取り敢えず、腕でガードしましたよ。

でも、痛い。

腕の痛みに怯んだ隙に、二本目のバットが目前に迫る。

防ぎ切れない。

”ぐぁ…” 枯れ切った喉からは、叫びにならない声が漏れた。

…走馬灯。

来ないじゃないか。

死なない、のか？

頭は割れる程、痛いのに。

ちら、と一瞬だけ、流れた映像は。

よりによつて、殺した女の苦しげな表情だった。

何てこつた…。

俺は罪から、逃れられないって訳か。

妙に納得しながら、俺は意識を失って倒れ込んだ。

第四話

目を開くと、意識はぼんやりとしていた。

俺、死んだのか。

とうとう死んじまったのか。

…あれ、三途の川は何処だろう。

辺りを見渡すと、女性が一人、立っている。

「すみません。三途の川は何処ですか？」俺は彼女に声をかける。
流石はあの世だ。もう、普通の声で話すことが出来る。あんなに、
喉は枯れていたはずなのに。

…って、何聞いてるんだ？俺は。

彼女はなかなか振り返らない。

そもそも、変な男から突然”三途の川は何処か”なんて聞かれたら
普通は振り向かない。少なくとも、俺だったら振り向かないな。

それにしても、彼女は一体何者なのだろう。

三途の川の番人、とか？

…あ。

もしかしたら、三途の川を渡れない人か。

訳合って、渡れない人がいる。

現世で生死をさ迷っている人とか、

…後は？

”とか”って言った割には、他の事例が浮かばない。

ああ、そう言えば。

俺はあの世についてよく知らないが、昔、こんな話を聞いたことがある。

女性が死んだ場合、彼女の処女を奪った人が三途の川の手前で待っていて、彼女を連れて川を渡るらしい。

その男が先に死んでいれば、待っていてくれるのだとか。

ちなみに、男がまだ生きている場合は、彼女が三途の川の手前で待っていないとはいけないんだとか。

一人では三途の川は渡れないから…らしいが。

その話を聞いた時、一瞬、素敵だな、とか思つかもしれない。

けどさ。

じゃあ、処女、並びに童貞の方々は一体どうするんだよ。一人で渡れって言っのか？

——って、矛盾にツッコミを入れなくなる。

皆、渡れなくて水遊びでもするのかな。

…三途の川で？

何だか、馬鹿馬鹿しくなった。
ま、どっちにしろ俺には関係ないし。

…何だよ。

別に良いじゃねーか。

俺のことなんてほっとけ。

——今、思うとき。

じゃあ逆に、プレイボーイ並びにプレイガールはどうするのか？

団体さんが全員揃うまで、待ってるのかな。
それとも男は、何往復もするのかな。

やっぱり、馬鹿馬鹿しくなった。
ま、どっちにしろ俺には関係ないし…。

ちょっとは、あるのか？

…うーん、あるかもしれない。

でも俺は、人並みと言つか標準と言つか…。

いや、止めておこう。

これ以上、何か喋ると、言い訳がましく聞こえるから。

…何だよ。

別に良いじゃねーか。

やっぱり、俺のことなんてほっとけ。

俺は独身貴族を貫くって、決めてるんだから。

——今笑った奴、あの世から化けて出て来るから待っつけ。

…まあ良いや。

とにかく、川を見付けるのが先だ。

俺、死んだのか。

本当に、死んじゃったのか。

もしかすると、あの女性は誰かが死ぬのを待ってるのか？

本当に死ぬ人にしか、川は見えないのか？

…ちょっと待て。

俺にはまだ、川も何も見えてないぞ。

俺、死んだのか？

本当に、死んじゃったのか？

…分かん。

金属バットで殴られて、頭がぐらぐらしていたのは覚えているが…。

あの女性には、川は見えているのだろうか。

それも含めて、聞いてみよう。

「すみません」俺はもう一度、声をかけた。

「…何でしょう」女性は振り向かずに戻る。

…あれ？

聞き覚えのある声だ。

まさか、”誰か”じゃなくて”俺”が死ぬのを待ってた人…とか、
言わないよな。

あんな、長い髪の美しい女性を相手にした覚えは…あ、でも、正直、
後ろ姿は好みだし。

忘れちゃってるだけで、昔、付き合ってた人だったりして。

「三途の川は、何処ですか？」…だから、さっきから何なんだ。こ
の問いの文章を変える気が、俺にはないのだろうか。

「三途の川、ですか？」女性は聞き返す。「あるじゃないですか、
目の前に」

「目の前？」俺は目を凝らす。まばたきをしたり、目をこすったり。
でも。

「いや…俺には見えないんですけど」

確かに、見えなかった。

三途の川も、天国や地獄でさえも。

そこには、草原が広がっているだけだった。

「おかしいですね」女性は答える。「私には、はっきりと見えるの
ですが」

「じゃあ、俺は…まだ死んでない、ってことか？」

頭の中で思ったただけだったが、つい口に出してしまった。

その言葉を聞いて、彼女は問う。

「貴方、死んでないの？」

「…いや、仮定だよ。だって君に見えている三途の川は、俺には見えてない…」
「貴方、死んでないの？」

彼女は俺の言葉を遮った。

「…多分」何だろう。

俺は怒られているような気分だ。

前にもこんなこと、あったような…。

「そう…貴方、死んでないのね」
哀しげにも聞こえる、沈んだ声。

そして振り返る彼女は、こう言った。

「——私は、貴方に殺されたのに」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6704x/>

twilight world

2011年11月27日15時47分発行